

1. 開催年月日：令和7年8月26日(火) 15時～

2. 開催方式：対面、web会議ツールにて実施

3. 委員(順不同・敬称略)

出席：鈴木 嘉一・宮崎 美紀子・砂川 浩慶・尾形 敏朗・山川 鉄郎・馬場康夫

web会議ツールにて出席：神田 由築・倉田真由美

放送事業者

代表取締役社長：宮川 朋之

常務執行役員：桑田 靖

局長：三品貴志、小川 英洋

編成制作局：三瓶祐毅、八巻洋平

番審担当：澤 尚志 碓井恭子

4. 議題

(1) 審議事項：日本映画専門チャンネル『戦後80年 内田也哉子 ドキュメンタリーの旅「戦争と対話」』

(2) 報告事項：時代劇専門チャンネルオリジナル時代劇『鬼平犯科帳 暗剣白梅香』

5. 議題(1)

映画『人生フルーツ』、『さよならテレビ』など話題のドキュメンタリーを製作してきた元東海テレビ・阿武野勝彦プロデューサーを迎え、戦後80年の日本を見直し未来へのメッセージを届ける6作品からなるシリーズ。本シリーズでは信越放送が過去に制作したドキュメンタリー6作品を手掛かりに、内田也哉子が旅人として様々な場所を訪れ、ゲストと戦争について対話する。過去のドキュメンタリー番組を挟むようにして内田也哉子とゲストが登場し語る番組構成。信越放送(SBC)、弊社の2社で共同制作した。審議対象は第1回の『無言感・レクイエムからの明日へ』。第一話目ゲストはフォークシンガーの森山直太郎。

【審議のポイント】企画全体、番組内容について

6. 議題(1) 審議内容 ※文中敬称略

- ・シリーズ1のみ視聴した段階では、信越放送の2006年のドキュメンタリーの力強さに比べ、前後で新撮した内田也哉子の存在に物足りなさを感じたが、再び視聴すると印象が少し変化した。戦後80年を迎え、マスコミ・メディアは戦争を伝える手法として“体験者の語り”ではなく、“次世代への継承”という切り口に変わっている。その視点で番組を見直すと、戦争を知らない若い世代が戦争体験者の思いを引き継ぎ自分達の言葉で伝えていくことは意義があり、戦後80年はその切り替わりのタイミングである、と感じた。我々世代も、終戦記念日には戦争について、先達と比べるとつたないかも知れないが自分達の言葉で新聞記事を出してきた。次世代が自分の言葉で考え、伝えていくことが大切だと改めて思った。
- ・2006年の信越放送『無言館』は信越放送のドキュメンタリーの秀作で、学生にも授業で見せている。過去の民放ドキュメンタリーは再放送や配信で見られる機会が少ない中、このチャンネルで放送されたことに意義を感じる。過去の秀作をこういう構成で見せるのは有りだと思ったが、ゲストまで必要なのか。先の参院選の国民民主、参政党ブームで明らかになったように、若者の政治的判断はムードに流されがちだ。今回の番組のように、味方にも敵にも絵を愛する兵士がいたこと、不条理の中で戦うのが戦争であると、

我々の世代が伝えていくべきだと真剣に考えた。日本映画専門チャンネルは有料放送ではあるが、戦争が希薄化されている中で、戦争はいけないと訴える番組を今後も継続してほしい。

- ・戦後80年の節目にこうした番組を企画した志は評価できるし、「無言館」の画学生と戦争の関係だけでも興味が引き立てられる。しかし、新撮した部分の内田也哉子の言動は軽く、冒頭部分の「(小学生を見て)かわいい」と言うところから、最後のまとめのコメントまで彼女の発言にはとまどった。戦争を語るには説得力がない。ゲストの森山直太郎も印象が薄く、番組構成は真ん中に挟んだ過去のドキュメンタリーとのバランスがちぐはぐだった。メインゲストには戦争体験者を起用すれば重みが出たはずで、往年の女優の戦争体験を聞く方が説得力はあるのではないか。題材は良いが、新撮部分の演出が足を引っ張っていたのが残念だった。今後は構成と人選にさらなる工夫を求めたい。
- ・絵の力強さと画学生の若さ、家族の言葉が素晴らしかった。紹介される絵の凄みは伝わってきたし、戦前の油絵の技術の高さにも驚いた。無言館の展示作品をもっと見たかった。2006年のドキュメンタリーなのに今見ても古びていない。内田也哉子は現代の象徴として理解できるが、戦争を知らず、強い関わりもない内田に、“戦争と対話する”役を背負わせるには無理がある。サポート役に徹した方が信越放送のドキュメンタリー部分が生きたのでは。森山直太郎との対話も言葉に重みがなく、ドキュメンタリーを補完する意味がどれだけあったのか疑問だ。時代が変わっても古びない良質なドキュメンタリーを継続的に届ける機会を今後も作ってほしい。
- ・信越放送のドキュメンタリーは初視聴ながら非常に力強く、掘り起こした意義は大きいと感じた。今回ドキュメンタリーの前後に新たな要素を加えているが、ドキュメンタリー中の証言者の強さを超える皮(側)を作るのは難しいと思った。アラフィフの出演者が戦争を「遠い」と正直に語るのを見て驚いた。ならばむしろ、戦争からもっと遠い、もっと若い人が語ったほうが新鮮だったかもしれない。ドキュメンタリーは爆発的な視聴率は取れないかも知れないが、力を入れてほしいジャンルだ。
- ・戦後80年。世の中は戦争を知らない日本人ばかりになっている。今年は世間でも戦争特集が多く、その中で目立ったのが戦争体験を受け継ぐ、新たな世代への継承という切り口だ。本番組は無言館の絵が観る者の想像力を喚起し、戦争を肌で知らない世代にも抑止力の大切さを伝える内容だった。ただし、単独の番組としては内田也哉子の出演意図がわかりにくい。今回シリーズをすべて見たが、途中から、母・樹木希林が出演した別番組『戦後70年 樹木希林ドキュメンタリーの旅』の足跡を内田が辿る形になっていることに気づき、そこからはとても楽しめた。トータルで見ても初めて意図がわかる仕組みならば、新シリーズの制作意図を視聴者に伝えるためにも、樹木の過去作も併せて放送すると広く告知すべきである。
- ・まずはこの企画に敬意を表したい。信越放送のドキュメンタリーは本当に素晴らしいが、今回制作した番組については他の委員と同じ感想を持った。戦後〇〇年という切り口にすると、先の戦争の記憶を紡ぐことになる。それも重要だが、今世の中は、ロシアによる2022年のウクライナ侵攻をきっかけに、多くの人々が次の戦争があるのではないかと漠然とした不安を抱いている。日本が次の戦争に巻き込まれるならば、その戦争は防衛戦争になるであろう、そうすると防衛ではすまされず日本は戦うことになるのかどうか---これは「戦後70年 樹木希林番組」の頃とは全く違う、現在の空気である。間に挟まれた信越放送ドキュメンタリーでは、身近な日常が壊され、親しい人が奪われる形で戦争が人々に影響する面がよく描かれていて共感を覚えるが、それを挟んだ番組で、戦争への危機感が十分に伝わってこなかったのが惜しい。内田也哉子と森山直太郎の話は抽象的で焦点が見えにくく、次なる戦争と正面から向き合う世代となるかも知れない当事者意識の希薄さに見ていて不安を覚えた。今は“戦前”かもしれないという視点は、今後の

大きな課題だと感じた。

- ・異例のコラボだ。フジテレビ系の東海テレビにいた阿武野プロデューサーが企画し、日本映画専門チャンネル、TBS系の信越放送が連携し、東京のポレポレ東中野などで劇場公開も行うという展開は非常に興味深い。本チャンネルは毎年夏に戦争映画特集を組むが、新しい特集を共同制作した点を評価したい。当時の証言についての補足取材や現在の視点からのトークがあり、単なる旧作の掘り起こしではなく、ドキュメンタリーの再生産にふさわしい。問題は、別番組となる『戦後70年〜』における樹木希林の独自の言葉が印象的で、ノンフィクション作家や歌人たちとの会話も成立しているのに対し、今回の番組の内田也哉子やゲストの発言にはそれが感じられないことだ。深い言葉で語れるゲストを希望する。委員からは色々な発言はあったが、皆、今回で終わりにせず、是非今後も企画を続けて欲しいと思っている。次回は節目の戦後90年ではなく、来年にも行ってほしい。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

- ・戦後80年の節目に信越放送との初の共同企画が実現し、母・樹木希林の番組を継承する形で娘・内田也哉子が起用された。谷川俊太郎ら戦争体験世代の出演も検討されたが、逝去などにより方針を転換、若い世代に届く人選を模索することに。出演辞退やスケジュールの都合で調整は難航した。委員の皆様の意見を今後活かしていきたい。
- ・終戦記念日に合わせて企画した『戦後80年 内田也哉子』は、専門チャンネルとしての使命を込めた取り組みだ。信越放送のドキュメンタリーを電波に乗せて視聴者に届けられたことは意義深く、母・樹木希林と娘・内田也哉子という設計図としての完成度は評価された一方で、視聴者への伝え方に課題も残った。内田・森山による抽象的な対談内容は、ご指摘もあったように今の戦争観をテーマにするなど、具体的なテーマ設定があればより深く語れたはず。今後はそれらを課題として内容を磨き、より良い形で届けたい。

7. (2) 報告事項：

- ・時代劇専門チャンネルのオリジナル時代劇シリーズ、『鬼平犯科帳』第6弾となる『暗剣白梅香』を7月に放送した。放送前の6月に初の有料ファンイベント『鬼平犯科帳祭』を開催。チケットは発売開始数分で即完売になり、当日販売したグッズも好評で、協賛各社が出展したブース也大盛況だった。主演の松本幸四郎ほかレギュラーメンバーに加え、ゲスト出演者の早乙女太一を招いたアフタートークは和気あいあいとした雰囲気。この時の模様はSP番組として、本編後に放送した。視聴率も非常に高く大成功となった。

8.

連絡事項 次回、第95回番組審議会は2025年11月11日(火)、16時から、対面、オンラインのハイブリッドにて開催予定。